



Title	英会話を中心とした英語運用訓練法
Author(s)	大坪, 喜子
Citation	長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 9, pp.105-111; 1986
Issue Date	1986-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10069/30022
Right	

This document is downloaded at: 2017-11-24T01:38:49Z

英会話を中心とした英語運用訓練法

大 坪 喜 子*

(昭和60年10月31日受理)

Activating the Passive English of Japanese Students

Yoshiko OTSUBO

(Recived October 31, 1985)

1. 英会話の指導における日本人教師の役割

日本の大学における英会話の授業は、たいてい、英語の自国語話者 (a native speaker of English) にまかされている。そして、それはあまりにも当然のこととして日本人教師に受け入れられており、一斉の英会話指導の責任は担当の英語の自国語話者にゆだねられている。しかしながら、英語の自国語話者が常に効率よく日本人学生の英語を話す能力を伸ばすことに成功しているとは言えないのも事実である。その原因はいろいろ考えられうるけれども、その主なものとして、英会話の授業での日本人学生の沈黙をあげることができるであろう。英語を話す練習をするのがその授業の主な仕事であるにもかかわらず、学習者である日本人学生は一言も発話することもなく、たいていは、教師である英語の自国語話者の話を聞いているだけになってしまう。

この沈黙の原因を日本人学生の立場から考えれば、中学校や高等学校において、日本人教師により日本語で英文法を中心に訳読をするという形式の英語の授業だけを経験して育ってきた場合、大学でいきなり英語の自国語話者による英会話の授業へ入れられれば、黙っているより方法がないのであろう。英語の自国語話者の簡単な発話さえも、彼らははじめて生きた英語に接することになるわけであり、すぐには聞きとれない仕事であろうし、また、どのように反応すればよいのかもわからないであろう。このために、黙ってしまうことになる。私自身も日本の大学での英会話の授業で同じような経験をしたことがあり、当時のことを思いおこせば、何か発言しなければならないと思うけれども何をどのように英語で言えばよいのか、まったくわからず、黙っているより方法がなかった。なぜそのようなことになるのかと言えば、その英会話の授業に出るまで、中学校、高等学校そして大学の他の英語の授業においても英語で意志伝達をするという練習をまったく経験したことがなかったからである。私の当時の能力では、せいぜい単発的な質問をしたりする程度で、英会話、すなわち、英語で対話をするということにはほど遠いものであった。

長崎大学教育学部において、これまで10年余り、中学校・高等学校の英語科教員養成の仕事にたずさわり、その間に、英語国で数回の研修を受けることにより、私自身の自らの英語運用訓練を行いながら、英語の自国語話者の外国人学生に対する英語の訓練法を観察することができた。そして日本人教師による英語の教えかたと英語の自国語話者による英

語の教えかたの相違に気づくことができたことは、大きな収穫であった。それは、日本の大学の英会話の授業において日本人学生がそれら二つのタイプの教師の指導法の間にある大きなギャップを自力で補えないで困っているのが私自身にはっきり見えるようになったことを意味する。これまで、そのギャップを自力で補うことができた学生だけが英会話の授業に積極的に参加でき、不幸にして、そのギャップを補うことができなかった多くの学生は沈黙を守らざるをえなかったということになる。そして、そのギャップをはっきりと認識し、それを埋める手助けをする英語教師は、少なくとも、大学ではほとんど見当らなかつたように思われる。日本人学生のためにそのギャップを埋めさせる手助けの方法をつくり出すのが、私のこれまでの10年間余の英語科教員養成における大きな課題であった。このため、まず私自身が海外研修および海外留学を経験するという方法を選んだ。海外で行われている英語教師養成のためのプログラムに参加できたこと、そして、英語国の大学院で言語学科の博士課程コースの単位修得を終えることができたこと、したがって、英語で授業を受け、英語で議論をし、また、論文を書くこともできたことなどの経験により、英語の自国語話者の立場に立って、日本人学生に英語運用訓練をすることも可能になった。事実、これまで数年間、英語科学生の英語運用訓練の相手をしてきており、日本人学生の英会話の手ほどきは、もし日本人教師に英語運用力があれば、文化を共有する日本人教師のほうが、文化を異にする英語の自国語話者よりは、効率よく行うことができると確信するにいたっている。以下、本稿では、過去10年間余りの試行錯誤の結果、創り出した英語科学生のための日本人教師による英会話の訓練法を示したい。

2. 「英語演習 I, II」の目標

「英語演習 I, II」(2年生)は、英語科学生のための英語運用訓練コースとして、日本人教師による授業と英語の自国語話者による授業の間の橋渡しの役目をするために開講されたものである。それは、英語科学生たちが中学校や高等学校における英語の授業で訓練されてきていれば、当然ながら不必要であるという意味で、英語科学生の英語運用訓練を補うコースであるといってもよい。

日本の学校教育の中で教育された日本人学生の多くは、英文法を中心に学習してきているため、英文法の規則は知っているけれども自分の意志を表わすために英語を実際に使うことができない。そのような知識としてもっている英語を受身英語 (passive English) と呼ぶとすれば、使えるように身につけている英語を能動英語 (active English) と呼ぶことができるであろう。英語をことばとして、または、伝達手段として使用するためには、受身英語を能動英語に転換させなければならない。この受身英語を能動英語に変えてゆくための訓練をするのが、「英語演習 I, II」の仕事である。変形文法の考えかたを用いれば、それは英語の規則を内在化 (internalize) させるための訓練であるということになる。

英語について知っているということと自分の言いたいことを英語で言えるということとは直接的に結びつかない場合が多い。特に、英文法・訳読中心の学習になれて育った人には、英語は常に苦闘しなければならない学科目として存在し、自分の意志を伝えるための生きたことばとしては認められないようである。毎年、英語科へ入学してくる10名の英語科専攻生たちもほとんどがそのような英語学習の指導を受けてきており、彼らが英語の自国語話者の英会話の授業でどのような反応をするのかについてはすでにふれたとおりであ

る。しかしながら、英語専攻生の中に、1、2名の割合で、中学校または高等学校で英語運用の指導のできる教師に出会っていて、積極的に英語の自国語話者の英会話の授業に参加できる学生がいることに注目したい。どのレベルかにおいて、一度、英語運用訓練を受けていれば、英語の自国語話者の授業に自ら積極的に参加できるらしいということに注目したいと思う。彼らは英語をことばとして学習する方法を体得しているように思われるのである。

「英語演習Ⅰ、Ⅱ」は、不幸にして、中学校・高等学校において英語運用訓練のできる英語科教師に出会う機会のなかった英語科の学生も卒業するまでには英語を伝達手段として使えるように自信をつけさせるための、受身英語から能動英語への最初の方向切換装置の役をするコースであるといってよい。知識としての英語を活性化(activate)させ、ことばとして使えるように方向づけを与えるコースである。

なぜこのような英語運用訓練が必要であるのかといえば、まず第一に、英語の使える英語科教師と使えない英語科教師とでは、その教えかたに大きなひらきが生ずることが指摘されうるからである。たとえ、「英語科教育法Ⅰ、Ⅱ」の授業で、いろいろな教授法や指導技術を学習したとしても、英語運用力のない英語科教師の授業の実際は、かなり限られたものになる。おそらく、これまでのような英文法・訳読中心の授業を永遠に続けなければならなくなるであろう。一方、教師に英語運用力があれば、学習者の必要性に応じて、教授法も幅広くとり入れることができることになり、中学校・高校における英語の授業にも多様性がみられることになる。第二に、これはもっとも重要なことであると思われるのであるが、英語が使えないと思っている英語科教師の多くは、英語を話すことができないと思っているために他の「聞く」、「読む」、「書く」の運用力があっても、結果的には英語運用に自信をもてない状態に陥っている。このため、英会話を中心として、受身英語を自ら活性化させ、英語運用力に自信がもてるようにする必要があるのである。

3. 「英語演習」の実際

英会話中心の授業においては、英文法・訳読中心の授業または英文解釈中心の授業では問題にならないところが問題になることがある。後者においては、通常、教師中心の授業で、テキストに依存した授業形式となり、そして、それは特に問題にはならない。むしろ、日本ではふつうの授業形式としては受け入れられている。しかしながら、前者においては、すなわち、英会話中心の授業においては、教師中心の授業形式をとれば、たとえその授業を英語の自国語話者が担当したとしても、前述のように、学習者にとっては英語の聴解力の練習のみをすることになり、英会話本来の仕事であることばのやりとりは、せいぜい、教師対少数の学生ということになってしまう。したがって、英会話の授業においては、学生中心の授業形式をとることが重要な要素となる。すでに知識としてもっている受身英語を学習者自身が、自ら、活性化させなければならないのであるから、英語によるやりとりを練習しなければならないのは学生たち自身であるからである。

「英語演習Ⅰ、Ⅱ」(2年生)では、思いきって、従来から日本で行われている教師中心の英語の授業の枠を破って、学習者中心の授業形態をとることにし、学習者たちがお互いに相手を利用しあって練習するという方法を取り入れ、特に、学習者たちが間違いを恐れず、むしろ、間違いながら自分自身の受身英語を活性化させることができるように工夫し

た。まず第一に、緊張感を取り除くためにゲームに類する練習を取り入れ、学習者が必ず相手に何かを言わなければならない状態に置くようにする。このためには、ペア・ワーク(a pair work)が有効である。つまり、ペア(a pair)を組ませて、お互いに、相手に、自分の知るかぎりの英語を使って、言いたいことを伝えるようにさせるのが効率がよい。

「英語演習Ⅰ」(2年生前期)の最初の四週間(週1回の100分授業)ほどは、ペア・ワークにより、間違いながら英語を使う練習をすることに慣れさせる。毎週、相手を交替させるようにして、自分だけでなく他の仲間も同じように間違いながら練習していることを知らせる。仲間も同じ状態であるということを知るのは、特に、日本人学生の英会話の練習においては意味のあることのように思われる。間違いを恐れたり、間違いを恥としたりする日本人特有の沈黙の原因が自然にとり除かれることになるからである。

ペア・ワークではどのような仕事をさせるのかというと、たとえば、意味のない簡単な絵を描いて、それぞれのペアの1人に渡し、他の1人には白紙を渡す。絵を持っているほうが、英語だけを使ってその絵を相手に説明し、聞いているほうは、その説明にしたがって絵を描くのである。絵が描けたら今度は役割を交替して、もう1人にほかの絵を渡し、同様に、英語だけを使って、その絵を相手に説明し、描かせるようにする。ペア・ワークでは、それぞれのペアによって当然ながら早い遅いの差は多少あるけれども、それは、この場合は、問題とはならない。むしろ、時間のゆるす限り、それぞれが受身英語を活性化させるために苦闘するように、次々と仕事を与えることが重要である。当然ながら、この授業では教師は英語を使うことを前提とするけれども、話す練習をしなければならないのは学習者のほうであるから、できるだけ、それぞれの学生に話す機会を与えるように、十分に絵と白紙を用意し、教室内を見まわり、絵が描き終えたところには次々に新しい絵を与えてゆく。この練習では、学習者の間違いは問わない。むしろ、間違いながら知識として持っている英語を使うことに慣れさせることに重点がおかれる。これが、「英語演習Ⅰ」の最初の仕事である。

四週間ほども経過すれば、学生たちは仲間どうしで英語を話すことに対する抵抗もなくなってくる。その頃から、自分の意見を表わすことができるような教材にかえることにする。最初の四週の間にも、やさしい絵から複雑な絵に変えてゆくようにしているけれども、絵を説明すること自体は、話し手の意見を言うことではない。実際のコミュニケーションでは、自分の意志を伝えるのが基本であるから、考えながら自分の意見を表現できるように学習者にとって興味のある教材を選び、彼らの立場で考えさせることにする。しばしば用いる教材は、日・米文化の相違を扱ったものであるが、テキストとその録音テープを用いる。各自で、テキストを授業前に予習し、録音テープも聞いておくことにしておく。教室では、もう一度、録音テープを聞いて、四、五人のグループでその内容について思うままに意見を出しあって話しあうようにする。この場合、話題が彼らに興味のないものであれば、すぐに沈黙に陥ってしまう。興味がなければ、言いたいことが出てこなくなるのである。沈黙をさけるために、教師のほうで、日・米文化の間でどこが問題になりうるかについてあらかじめ説明しておくこととよいようである。学生たちは、日本文化の中で育ち、他の文化と衝突するということがどういうことであるのかさえわからないのがふつうであるので、テキストのそれぞれの課の話題とかかわりのある具体例を日本人の立場から補足説明する。それから、30分ないし40分の時間を与え、それぞれのグループで自由に話をさせ

る。この時、話題がなくて沈黙のつづいているグループには教師も参加し、ヒントを与えたり、仲間の1人として意見を述べたりする。そのあと、それぞれのグループでどういうことを話しあったのかをクラスの他のグループへ説明させる。この場合、口数の少ない学生を選んで発言させたり、説明不足の場合はそのグループの他の仲間が自由に補足するという方法をとったりする。また、聞いている他のグループには、質問やコメントがあれば自由に発言するようにしむける。最後に、宿題として次週までに各グループで話しあったことをもとに、自分の意見をエッセイとしてまとめてくるようにする。高校までに、文レベルの練習だけしかなされていなかったため、彼らには、エッセイを書く訓練も、パラグラフ構成、文と文との連結のしかたなど、英語の修辞法にしたがって自分の意見を述べるはじめての経験である。

「英語演習Ⅰ」(二年生前期)が終る頃、学生たちは、ちょうどこの授業でしなければならない仕事になれた段階である。英会話を中心とした英語運用力を身につけるためには、さらに訓練を継続させる必要がある。このため、「英語演習Ⅱ」(二年生後期)においても同じ方法で英語運用訓練が続けられる。学習者にとって、話したくなるような話題を提供し、彼らが多く仲間と英語で話しあえるように配慮しながら、頭だけでなく身体をとおして英語を学習できるように工夫するのが、英語運用訓練における教師の仕事であるようである。

4. 学習者中心の授業の長所

学習者が自ら学ぶという方向で運営される学習者中心の授業の長所は、第一に、学習者が全員参加でき、それぞれに成就感または満足感が得られることである。「英語演習」の場合、それは学習者たちの英語を自由に話せるようになりたいという強い意志に支えられて特に効果的であるといえる。学生たちは、仲間どうしでお互いに相手を利用しながら、または、助けあいながら、英語を話すことに慣れてゆくことができる。第二に、ここで用いたペア・ワークまたはグループ・ワークの副産物として、相手の言うことに耳を傾ける習慣が身につくことをあげることができる。この方法を用いる以前に、一つのテーブルを10名の英語専攻生たちが囲んで、録音テープを聞いてその内容について話しあうという形式を用いていたのであるが、学生たちは、仲間が意見を述べているとき、その意見に耳を傾けるより、自分の順番のときに何を言うかをいっしょうけんめい考えているという状態であった。間違わないで言えるように、頭の中で文章を作るのに忙がしく、他人の意見など聞いてはおられないという状態であった。ペア・ワークやグループ・ワークは、会話の基本である「やりとり」が自然に身につくようである。英会話の訓練においては、学習者中心のグループ・ワークはかなり有効な教室内の指導技術であることを指摘しておきたい。

5. 「英語演習」についての学習者側からの評価

このような学習者中心の英会話の練習において、日本人学生たちがどのような反応を示すのかについてふれることは興味あることであろう。教師の立場から述べるなら、これまでのところ、2年生前期からこのような練習をはじめた場合は、ほとんど例外なく、楽しそうにうなりながら単語をさがしたり、うまく伝えられなくて苦闘しながらそれでも楽しそうに聞き手に何か話そうとしている光景が教室のあちこちでみられる。友達も同じよう

に英語でうまく言い表わせないことを知ることにより、気持の負担が軽くなるようで、学生たちはお互いに辛棒強く相手の言うのを待っている光景もしばしば見られる。はじめに期待していたよりもはるかに学生たちの評判もよく、効果的に作用しているようである。教師は教えるというよりは、学習者が話しやすい雰囲気をつくり、話しやすい教材を用意し、最大限に個々の学習者が話す機会をもてるようにすればよい。この授業では、学生たちが中心となり、彼らがそれぞれ楽しい苦闘をしているという授業風景となるのである。

次に、学習者の立場からの「英語演習」についての評価を示すことにする。昭和60年度前期「英語演習Ⅰ」(2年生)が終った段階で、学生たちにこの授業についての彼らの評価を最後のエッセイに書いてもらった。その中から1つを選んで、学習者の立場からの評価の例として示す。これは原文のままであることをことわっておく。

“Reflection”

M. Ohishi

Through this course of six months, I had learned a lot of things. I could acquire the differences of the way of thinking between the Americans and the Japanese. And I could practice to speak English in public. Besides, I could get accustomed to writing essays. These classes are very helpful to me in all aspects.

First, as for the textbook, it is very interesting for me. It makes me recognize what I wasn't aware of what I didn't know about English. What I think as a natural reaction, thought or behavior in Japan sometimes seems to be strange, rude or unnatural to the Americans. I could learn why these misunderstandings happen. As each content shows some examples occurred from such misunderstandings, this book is easy to understand what the author says. Second, through these classes, I'm accustomed to speaking English in the presence of others. Though I don't know whether my ability of speaking English improve, it is true that I could acquire the attitude to trying to speak English, and I come not to be shy. It is partly because I always discuss with my close friends. Lastly, I could get accustomed to writing essays. At the beginning of this class, I don't like to write essays because it took a few hours and it was difficult to make contents unite. But every time I write it, I come to get accustomed and I could write it without much troubles. It is very useful to me.

I think these classes are very complete through the whole. If I request one thing, I would like to discuss with other members.

このエッセイは、「英語演習Ⅰ」において学習者がどういう仕事をしていたかを示すであろう。この他の学生たちの意見にも興味あるものが見られる。たとえば、話したり、書いたりするためには、自分自身の意見を言わなければならないのがむづかしいということ、従来の文法・訳読、また、和文英訳の授業では受身 (passive) でよかったのが、この授業では能動的 (active) にならなければならなかったということ、そして、話題に興味がないと何も言えなくなることなどのコメントが述べられていた。また、上に示したエッセイにもみられるが、グループ・ワークのメンバーが固定化してしまったことに対して、もっと他

の仲間とも話したいという意見がかなりみられたのはおもしろい。教師がグループを指定しているのではないのであるから、いつでも自分たちで自由に交替してもよいのであるが、仲間を自由に替えることができないのも日本人学生らしい特徴であるのかもしれない。

6. まとめ

ここで示した学習者中心の英語会話訓練法は、英語教育の立場から言えば、“fluency activity¹⁾”と呼ばれうるもので、“accuracy activity²⁾”に対するものである。「英語演習」での学習活動は、Wilga Riversのいう“skill-getting³⁾”から“skill-using⁴⁾”へ移行する学習活動(activity)であると考えてよい。Riversでは“skill-getting”は“Cognition”と“Production”(または“Pseudo-communication”)を、“skill-using”は“Interaction”をそれぞれ指している。一般に、日本の学校教育では“skill-getting”までを扱っており、“Cognition”と“Pseudo-Communication”のレベルで終わっていることになる。しかしながら、国際化社会へ急速に移行している現代の英語科教育には、“skill-using”の訓練の導入が急務であるのは論をまたないであろう。ここで示した長崎大学教育学部英語科学生のための英語運用訓練法は、日本の学校教育の中で育てられた日本人学生たちのために有効に作用しているということができるであろう。この方法は、中学校・高等学校にも応用されるものであり、それぞれの立場での教師の創意工夫の一助となることが期待される。また、日本人学生に英会話を教える英語の自国語話者にも役立つものと思われる。

注

1. Christopher Brumfit, p.2 ff.
2. Ibid., p.2 ff.
3. Wiga M. Rivers, p.27.
4. Ibid. p.27.

参考書目

1. Brunfit, Christopher; "The Limits of the Language Syllabus," RELC REGIONAL SEMINAR : NEW TRENDS IN LANGUAGE SYLLABUS DESIGN(1982)
2. Brumfit, C. J. and K. Johnson(eds.); *The Communicative Approach to Language Teaching*. (1979) (Oxford University Press.)
3. Klippel, Friedrike; *Keep Talking : Communicative fluency activities for language teaching* (1984) (Cambridge University Press)
4. Rivers, Wilga M.; "From Linguistic Competence to Communicative Competence," (eds.) Yoichi Kitaichi & others, *Teaching English as a Foreign Language: A Book of Readings*(1977) (The EIHO SHA LTD)
5. Smith, Larry E. (ed); *Readings In English As An International Language* (1983) (Pergamon Press)
6. Smith, Larry E. (ed.); *English For Cross-Cultural Communication*. (1981) (St. Martin's Press)